

労働力調査個票を用いたフロー分析---リーマンショック前後の変化に注目して

2015年11月27日
リクルートワークス研究所
戸田淳仁

1

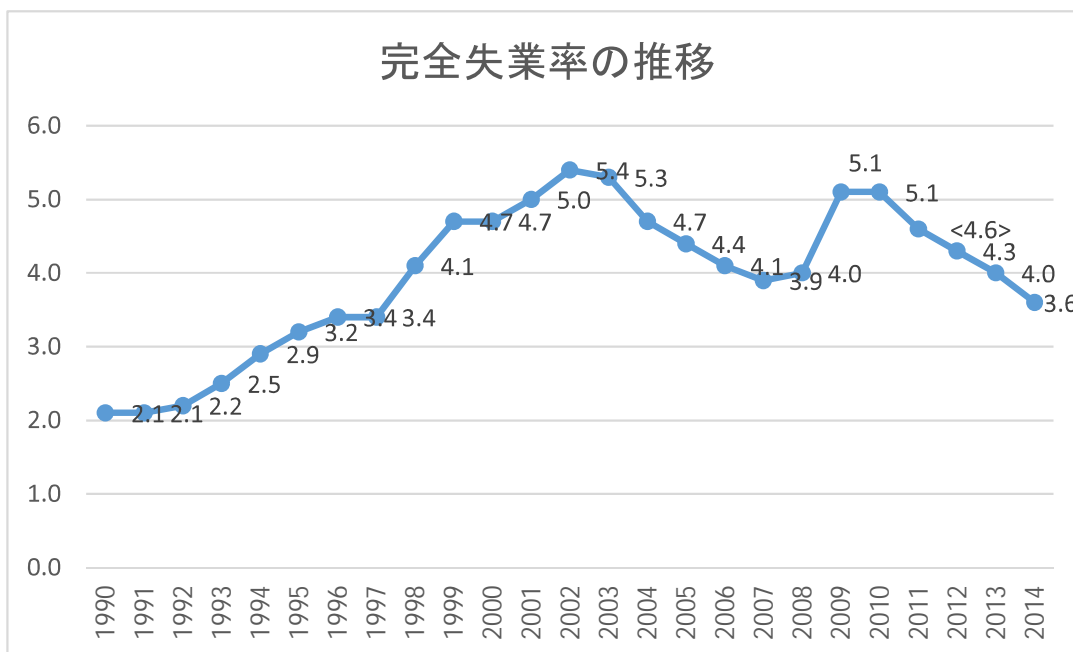
問題意識

- 労働経済学では労働力フローの分析が行われ、失業率の変動などについて分析(最近の研究では桜(2006)、長尾・高尾(2015)など)
- リーマンショックのように景気の大きなショックによって労働市場の変動がどのようになっているか。どのような経路で失業率が大幅に上昇したのか、フロー分析を用いて理解したい
- 今回の研究は途中段階であり、過去の不況期との比較も今後行いたい

2

背景

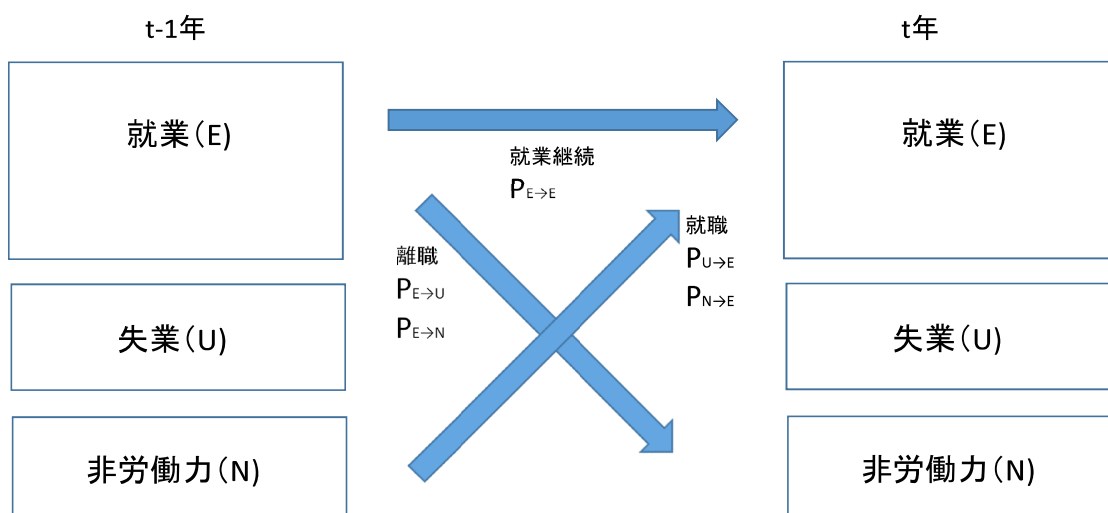
- 完全失業率は2008年4.0%→2009年5.1%と急上昇



3

分析方法

- フロー分析を用いる。就業状態を就業、失業、非労働力として、状態がどう推移しているかを見る
- 就業状態が観測されないサンプルは除外



4

使用するデータ

- 総務省統計局「労働力調査」2006年～2010年の匿名化された個票データ
- 上記データには前月の就業状態と今月の就業状態が記録されているため、前月と今月の違いを見る。ただし前月の情報は就業状態しかなく、前月のその他の情報が記載されていないため、就業状態の比較を主に報告
- 前月と今月の就業状態の変化はウェイト値(1/2標本集計用乗率と集計用乗率の積)を用いて集計

5

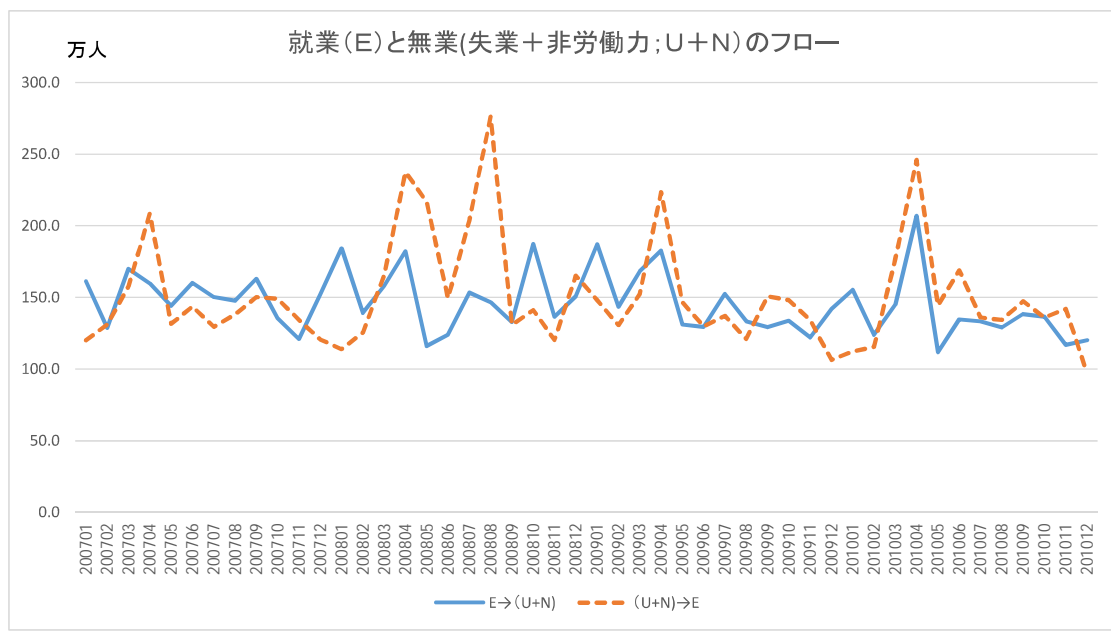
使用するデータ(続き)

- フローデータの表記として以下のように示す。
 - E: 就業
 - U: 失業
 - N: 非労働力
 - UとNをあわせて無業とする
 - $E \rightarrow (U+N)$: 前月就業、今月無業の人数(万人)
 - $(U+N) \rightarrow E$: 前月無業、今月就業の人数(万人)
 - $E \rightarrow U$: 前月就業、今月失業の人数(万人)
 - $U \rightarrow E$: 前月失業、今月就業の人数(万人)
 - $U \rightarrow N$: 前月失業、今月非労働力の人数(万人)
就業意欲喪失効果
 - $N \rightarrow U$: 前月非労働力、今月失業の人数(万人)
追加労働力効果

6

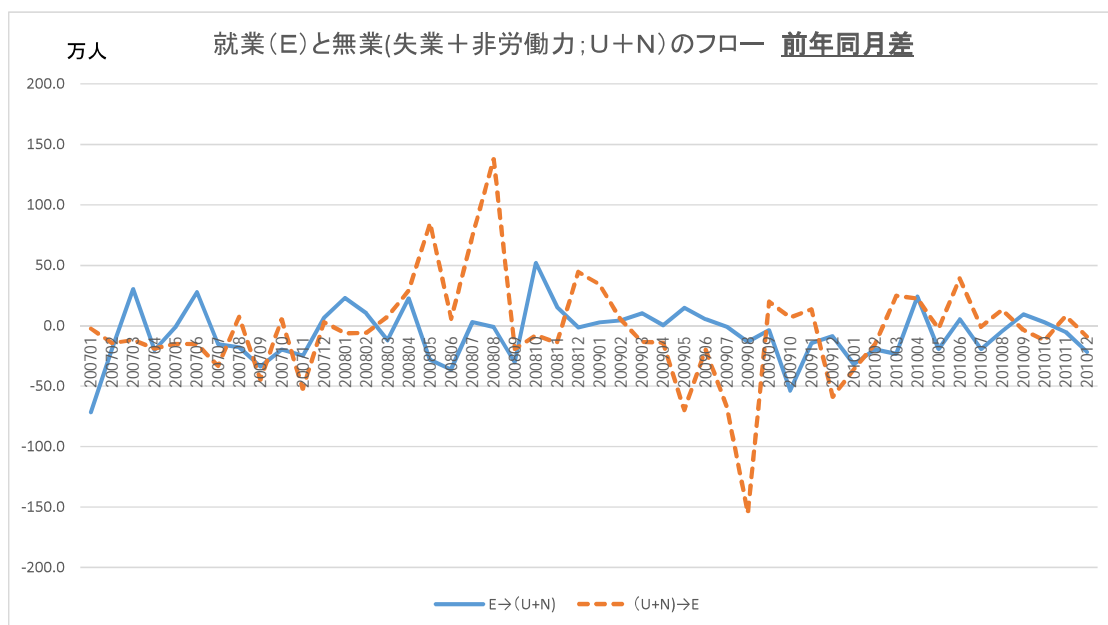
就業(E)と無業(U+L)のフロー(全年齢)

- 2008年9月を境に、就業→無業(青線)が無業→就業(赤線)を上回る。ただし季節変動があり、見えにくい



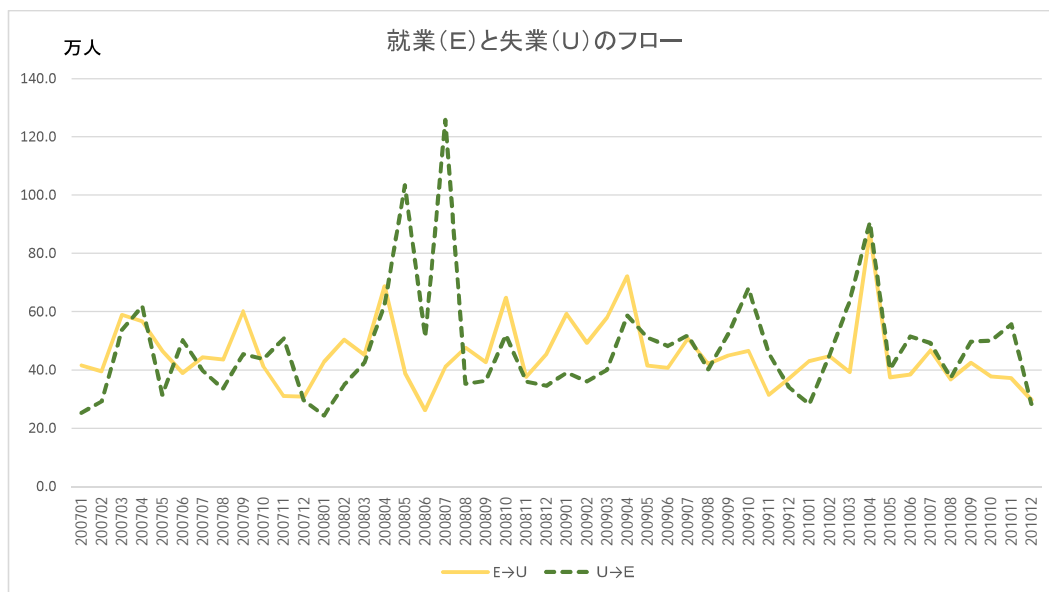
就業(E)と無業(U+L)のフロー(全年齢)差分

- 2009年に入り無業→就業(赤線)が対前年を下回る。
- ただし2008年は8月までは大幅に上回り、12月もプラス



就業(E)と失業(U)のフロー(全年齢)

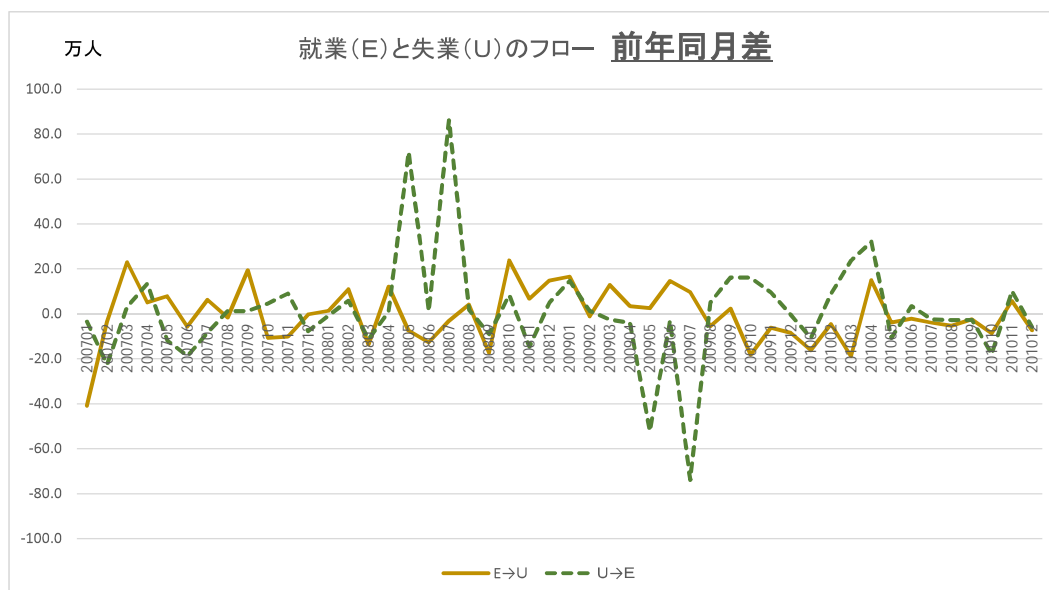
- 一部を除き水準は同程度。ただし2009年は就業→失業(実線)が失業→就業(点線)を上回る時期が多い



9

就業(E)と失業(U)のフロー(全年齢)差分

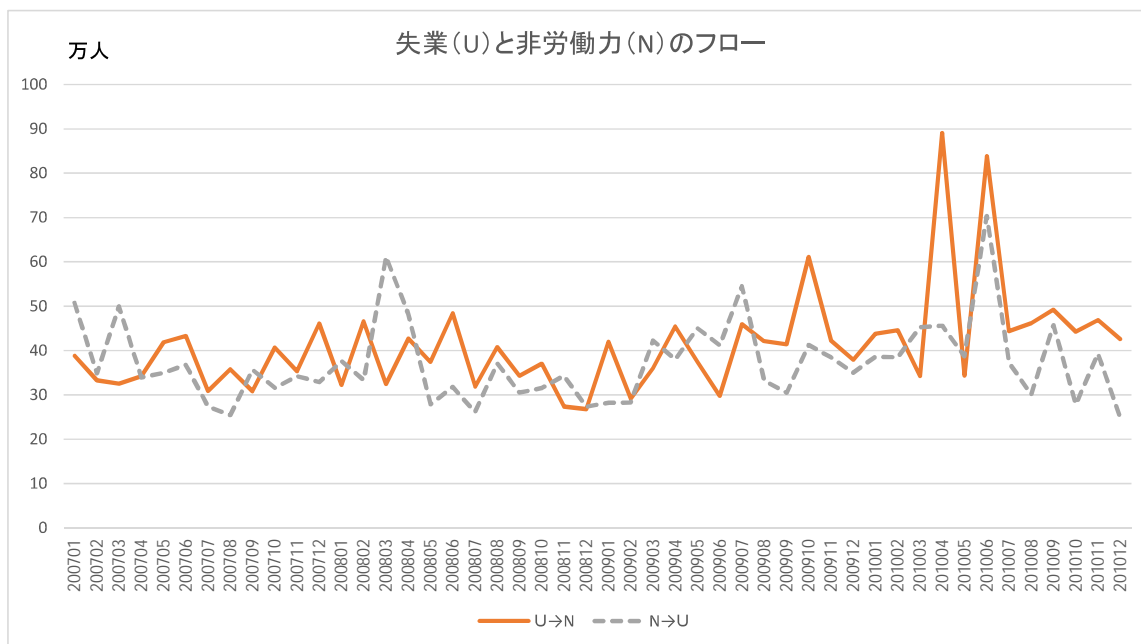
- 2009年に入り失業→就業(点線)が対前年を下回る。
- ただし2008年5月、7月には大幅に前年を上回る



10

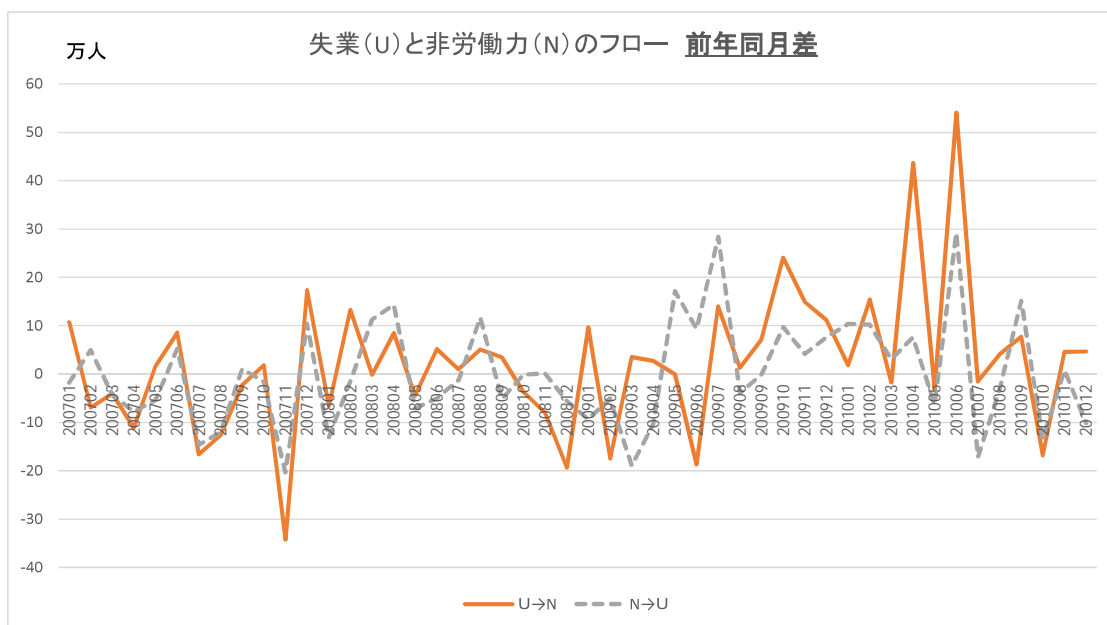
失業(U)と非労働力(N)のフロー(全年齢)

- 一部を除き同程度の変動。季節変動があるのでわかりにくい



失業(U)と非労働力(N)のフロー(全年齢)差分

- 非労働力→失業(点線)は2008年12月から翌4月までマイナス。その後プラスが続く。



ここまでのまとめ

- 就業の大きさは、リーマンショック直後においては、失業者が就業者になれないという傾向が強く、逆に就業者が無業になるということは大きく観察されない(うまく転職ができている可能性)
- 2009年に失業率が急増したが、失業から就業に抜け出せないだけでなく、非労働力から失業へのフローが影響を与えていることがわかった
- リーマンショック直後には影響が出ず深刻な家今日は2009年に入ってからと変動に一定のラグがあるといえる

13

追加的な分析

- 以下では、性別、年齢別(集計の都合上15~34歳、35~54歳、55歳以上の3区分)も結果も示す。
- 結果が膨大であるため、リーマンショックの影響が大きく出ている、2009年第1四半期(Q1: 1~3月)、第2四半期(Q2: 4~6月)、第3四半期(Q3: 7~9月)の値、前年同時期との差を見る。
- 今後の検討課題として、
 1. 無業から就業に至る過程を丁寧にみる(産業、職業、従業上の地位などに特徴がみられるか)
 2. 就業構造基本統計調査や国勢調査などで同様のことを検証する

14

性別・年齢別結果(男性)

		2009年の値			前年同時期との差		
		Q1	Q2	Q3	Q1	Q2	Q3
男性計	E→(U+N)	70	70	65	7	5	6
	(U+N)→E	51	65	52	-2	-23	-58
	E→U	31	33	28	8	6	6
	U→E	21	26	24	2	-16	-12
	U→N	15	16	16	0	1	4
	N→U	12	17	13	-6	2	-1
男性 15 ～34歳	E→(U+N)	32	24	24	3	-2	2
	(U+N)→E	22	35	22	-5	-4	-45
	E→U	15	13	12	6	-1	3
	U→E	8	12	11	-1	-1	1
	U→N	6	5	7	0	-1	3
	N→U	7	7	6	0	1	1
男性 35 ～54歳	E→(U+N)	10	14	11	1	4	2
	(U+N)→E	11	11	10	3	-16	-17
	E→U	7	10	7	0	4	2
	U→E	10	8	8	4	-14	-14
	U→N	2	2	3	-1	0	0
	N→U	2	4	3	-1	1	1
男性 55 歳以上	E→(U+N)	27	32	29	2	4	2
	(U+N)→E	18	19	20	-1	-3	5
	E→U	8	10	8	2	4	2
	U→E	4	6	6	-1	0	2
	U→N	7	9	7	1	2	1
	N→U	3	6	4	-5	1	-2

15

性別・年齢別結果(男性)まとめ

- 無業→就業の落ち込み(前年差マイナス)は男性・計で大きい。逆のフローは微増。それは特に若年者(15～34歳)で顕著。
- 失業→就業も無業→失業とほぼ同様の傾向であるが、若年者(15～34歳)については前年とそれほど大きく違いはなく、中年者(35～54歳)では、失業→無業の落ち込みが大きい。
- 失業と無業の間で見つると、男性・計では大きな変動はない。ただし、非労働力→失業はマイナスの時期が一部ある程度。

16

性別・年齢別結果(女性)

		2009年の値			前年同時期との差		
		Q1	Q2	Q3	Q1	Q2	Q3
女性計	E→(U+N)	97	77	74	-1	1	-12
	(U+N)→E	93	101	85	11	-12	-10
	E→U	25	18	18	1	1	-4
	U→E	18	27	24	3	-4	-6
	U→N	21	21	27	-1	-6	3
	N→U	21	25	26	-5	4	9
女性 15 ~34歳	E→(U+N)	42	24	31	3	-7	-3
	(U+N)→E	38	50	33	6	-5	0
	E→U	14	8	8	1	-3	-5
	U→E	9	17	12	1	-1	2
	U→N	9	7	10	-2	-1	-2
	N→U	8	11	10	-4	3	2
女性 35 ~54歳	E→(U+N)	30	26	19	1	6	-4
	(U+N)→E	30	27	29	4	-3	-8
	E→U	9	8	7	1	2	1
	U→E	7	8	10	1	-3	-9
	U→N	8	10	11	1	-4	4
	N→U	8	10	12	1	2	8
女性 55 歳以上	E→(U+N)	26	28	24	-5	2	-5
	(U+N)→E	25	24	23	1	-4	-2
	E→U	3	3	3	-1	1	-1
	U→E	1	1	1	0	-1	0
	U→N	4	4	6	0	-1	2
	N→U	5	4	4	-1	-1	-1

17

性別・年齢別結果(女性)まとめ

- 無業→就業の落ち込みは男性ほど大きくはないものが見られる。就業→無業も前年比マイナスの時期がある(男性と結果が異なる)。ほぼどの年代でも落ち込みの幅は同程度。
- 失業→就業、就業→無業も前年比マイナスの時がある。人数の点から年齢ごとに大きな特徴は見られず、ほぼ等しく低下している模様。
- 失業と無業の間では、失業→非労働力が大きく落ち込む時期もあるが、ほぼ微増、微減をくりかえしている。

18

分析のまとめと今後の検討課題

- 2009年にかけて無業から就業へのフローが大きく落ち込むことと、非労働力から失業へのフローが増えたことにより失業者が増加。
- ただし性別によってフローの動きが異なる。特に男性では、無業→就業の大きな落ち込みを経験しているが、女性はそれほどではない。男女別の分析を詳細に行う必要
- 無業→就業の動きについてはどのような仕事に就いたかほかの情報もあるので合わせた分析が求められる。

19

参考文献

- Esteban-Pretel, Julen, Ryo Nakajima and Ryuichi Tanaka(2011) “Changes in Japan’s Labor Market Flows due to the Lost Decade” RIETI Discussion Paper Series No.11-E-039
- 玄田有史(2010)「2009年の失業一過去の不況と比べた特徴」『日本労働研究雑誌』No.598 pp.4-17
- 桜健一(2006)「フローデータによる我が国労働市場の分析」『日本銀行ワーキングペーパーシリーズ』No.06-J-20
- 長尾伸一・高野正博(2015)「労働力調査の1年間のフローデータを用いた最近の雇用情勢に関する分析」『統計研究彙報』72号、pp.1-24.

20